

福島県病院協会ニュース

発行所：一般社団法人 福島県病院協会／発行人：佐藤勝彦／発行日：令和5年5月8日(月)

〒960-8036 福島市新町4-22(福島県医師会館3階)／TEL 024-521-1752／FAX 024-521-2986／URL <https://fukushima-ha.or.jp/>

第49号

地域の皆様のため「人を愛し、病を究める」

一般財団法人大原記念財団大原綜合病院 院長 小山 善久



この度二〇二二年四月一日付の後任として、佐藤勝彦先生記念財団大原綜合病院の院長に就任いたしました。福島県病院協会の皆様には常日頃から大変お世話になつておりありがとうございます。

私は一九八五年に日本大学医学部を卒業し、福島県立医科大学旧外科学第二講座(阿部力哉教授)に入局しました。専門は消化器外科、特に肝胆膵外科領域疾患を中心に手術、化学療法などの診療を行つておりました。また肝腫瘍に対する有効な塞栓化学療法について、二〇一三年四月より福島県立医科大学旧器管制御外科学講座主任の竹之下誠一教授(当時)のご高配により副院長として当院に赴任いたしました。当院は古くから福島県立医科大学旧第二外科の関連病院でもあり、私自身も一九八六年八月から約一年間外科の研修をさせて頂いたさまざまな。昼夜を問わず外科の仕事に没頭していた記憶がございま

す。胆のう摘出、胃切除、大腸切除、食道切除など初物といわれる手術はすべて経験させて頂いた。多くの基本手技を学んだ病院でもありません。二度目の奉公といふことで今回赴任して以来外科手術、がん治療そして後進の指導や診療体制の確立とチーム医療の推進を求め邁進しております。

特に力を入れてきたのは「がん患者サポートチーム」の活動です。幸いなことに興味のあるスタッフを集めることができ、二〇一八年九月に多職種で対応していくチームを結成できました。メンバーは認定看護師を中心に病棟・外来・化学療法室・退院支援の看護師にも参加していただき、さらに薬剤師、MSW、理学療法士(PT)、栄養士などで構成されています。具体的な活動内容としては外来治療中の消化器外科の患者さんを対象に月二回のカンファランスを行つていきます。カンファランスの流れとしては、事前に対象となる患者の治療経過や方針、さらに過去の介入内容を把握し、その後主治医が患者情報と経過説明を行い、次いで多職種が介入状況や情報を各々の職種が発言し皆で共有します。さらに問題点と介入計画を検討していきます。実際の対象患者は進行再発がんで終末期移行が予想される方、また積極的がん治療が困難な方とし、今まで五〇名以上のがん患者に介入しました。今

後は進行がんの診断時や再発診断がなされた時点でのより早期のACP(アドバンス・ケア・プランニング)を行いながら多くのがん患者にサポート活動を行つていきたいと思っております。当院は一八九二年(明治二十五年)に開院し、一月には一三一年目を迎えました。この間地域の皆さまに安全で安心できる高度な医療を提供するため、時代とともに変化を遂げてまいりました。二〇一八年一月に市内上町に免震構造を有する新病院へ移転し五年目を迎えた現在、病床数三五三床、二八診療科を有し地域医療支援病院として東北地区の中核を担つております。機能的には総合救急センター、手術センター、HCU、屋上ヘリポートを完備して救急・手術・高度専門医療を連携して行える体制を整え、また広域災害医療にも対応可能な急性期病院として地域医療の一翼を担つております。加えて地域周産期母子医療センターとして産婦人科小児科の連携により妊産婦、新生児への適切な管理ができる医療体制も備えています。昨年九月には病院機能評価の審査を受審し、一般病院2(StarCC Version 2.0)の更新認定を受けました。

また臨床研修指定病院として三年連続フルマッチとなり現在一六名の初期研修医が在籍しております。当院の研修プログラムは、「研修医の研修医による研修医のための研修プログラム」をモットーとし、医師をはじめとした全ての医療スタッフが臨床研修医を多方面からサポートし、研修医の声を率直に聞き入れ、研修医と共に指導医も医療の原点に戻ることで、臨床現場で広く社会に貢献できる医師育成の研修プログラムを研修医と共に創り歩んでおります。開院以来、一世紀以上にわたる脈々と受け継がれてきた当院の医学研究や診療の実績から、財団では一人を愛し、病を究める」を理念に掲げています。これからの福島の医療を担うべき信頼できる優れた医療人を育成し、新しい時代に見合う最良の医療を探究しながら、地域の皆様のために取り組んでいく所存です。

三年以上におよぶ新型コロナウイルス感染症は人々の生活を脅かし、暗い影を落としました。その爆発的流行は第八波までになり、幾度となく医療現場は窮地に追い込まれました。当院でも一般救急医療現場での感染管理をしながらの診療は患者だけでなく、職員にも大きな負担となりました。また親睦会などの院内イベントもオンラインでの開催となり、重苦しい雰囲気がまだまだ消えていません。皆で協力しながらこの難局を乗り越えていきたいと思いが五月八日には感染症分類が五類へ移行しますが、新型コロナウイルス感染症がなくなるわけではありませんので、引き続き基本的な感染対策を守りながら地域の皆様のために専門医療、救急医療をすすめていきたいと思っております。

最後に、福島県病院協会の皆様には、引き続きご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

会津西部地区中核病院として

J A福島厚生連 坂下厚生総合病院 院長 高田 信



この度二〇二二年四月一日付
けをもちまして、松井遵一郎先
生の後任としてJ A福島厚生連
坂下厚生総合病院の院長に就任
いたしました。福島県病院協会
の皆様には、常日頃より大変お
世話になり、まことにありがと
うございます。

私は一九八八年福島県立医科
大学旧第二外科（阿部力哉教
授）に入局いたしました。大学
病院や医局関連病院（太田西ノ
内病院、塙厚生病院、星総合病
院、耕記念病院）にて研修させ
ていただきました。

一九九七年四月阿部教授のご
高配により、坂下厚生総合病
院外科に着任、杉本光郎先生・
及川幹夫先生に公私ともにご指
導いただき、一般・消化器外科、

更に甲状腺・乳癌検診とその診
療を行ってきました。二〇一二年
度より外科部長、二〇一五年
より副院長となり、今回七代目
院長を拝命いたしました。

当院は、会津西部地区に位置
し、一九五八年九月農村地域に
おける農家組合員ならびに地域
住民の医療の確保と保健活動の
普及を目的に、福島県立医科大
学県内初の関連病院として、病
床六〇床（内科・外科・産婦人
科）で開設されました。翌年耳
鼻咽喉科、一九六〇年三月伝染
病棟二〇床、同年五月整形外科、

一九六二年八月眼科を開設、一
九六三年総合病院に昇格しまし
た。その後増築と一七九床まで
増床を行い、地域住民の皆さま
の要望もあり一九八〇年一月小
児科、一九九三年九月泌尿器科
を開設、二〇〇二年血液透析セ
ンターが完成、会津西部地区初
の人工透析医療を開始しました。

二〇一一年東日本大震災時、
築五三年を経た当院も震度五弱
の揺れに見舞われ、耐震性の面

からも建替えが必要と判断しま
した。①建物の老朽化・狭隘化
により治療・療養環境の確保が
困難になってきた②最新医療に
対応する設備、医療機器整備の
必要性③将来に亘っても質の高
い医療サービスの提供を目指
す、以上を新病院整備の理念と
し、二〇一四年新病院検討会議
を立ち上げ協議を進め、二〇二
一年十一月一日念願の新病院に
新築・移転しました。

現在診療科一七科（内科、循
環器科、小児科、心療内科、精
神科、消化器内科、外科、整形
外科、呼吸器内科、婦人科、眼
科、耳鼻咽喉科、皮膚科、泌尿
器科、形性外科、放射線科、リ
ハビリテーション科）、病床数
一五九床（地域包括ケア病床二
一床含）で診療を行っております。
常勤医師は、内科六名、外
科三名、整形外科二名、婦人
科・眼科・小児科・放射線科各
一名で、循環器・皮膚科・耳鼻
咽喉科・形成外科は福島県立医
科大学ならびに附属会津医療セ

ンター、泌尿器科は東京医科大
学より診療応援をいただいでお
ります。常勤医師一六名中五〇
歳台六名、六〇歳台四名、七〇
歳台一名と高齢化が進み、将来
を担う若き人材確保が急務であ
り、多方面への働きかけを行っ
てはおりますがなかなか難しい
状況です。働き方改革関連法で
は、時間外労働の上限規制やタ
スク・シフトイング等労務管理
の計画的取組みが求められ、医
師の都市部診療科偏在が解消さ
れない中、農村地域における医
療の確保はさらに厳しさを増し
ていくことが予想されます。

また、農村部の共通問題であ
る少子高齢化があります。福島
県五市町村中、当院の医療圏
一一市町村は、県高齢化率上位
一位から六位まで入っています
（二〇二〇年四月現在）。よって
地域医療のみならず、健康管理
活動、高齢者福祉・介護事業に
も併設介護老人保健施設「なご
み」や関係各署と協力して取組
んでおります。

J A福島厚生連の基本方針で
ある「すべての人に健康と福祉
を」「住み続けられるまちづく
り」を中心としたSDGsの実
現に向け、安心して暮らせる
豊かな地域社会づくりにも貢献
していかなければならないと考

えております。県も地域医療
構想の中で、医療機能分化・強
化、医療と介護の連携を推進し、
「公的医療機関等二〇二五プラ
ン」の策定を求めその対応を加
速化させており、今後会津西部
地区の実情に応じた当院の役
割について、再度検討が必要と
なっております。

更に長引く新型コロナウイルス
感染症による様々な問題があ
ります。当院は重点医療機関と
して、二〇二一年五月より感染
患者入院受入れ（最大一四床）、
住民ワクチン接種、発熱外来等
を行ってきました。政府は本年
五月より五類への変更を予定し
ていますが、まだまだ予断を許
さない状況です。これまで幸い
にも院内クラスター発生は認め
ておりませんが、今後も十分な
感染対策を講じながら、合わせ
て経済社会活動を正常化してい
かなければなりません。

当院の理念「地域との連携を
通して安全と信頼を基本とし
た思いやりのある保健・医療・
福祉の提供に努めます」を基に、
職員一丸となり会津西部地区中
核病院として努力してまいり
存でございます。今後とも宜し
くお願い申し上げます。

院の理念「地域との連携を
通して安全と信頼を基本とし
た思いやりのある保健・医療・
福祉の提供に努めます」を基に、
職員一丸となり会津西部地区中
核病院として努力してまいり
存でございます。今後とも宜し
くお願い申し上げます。

病院紹介⑤

公立小野町地方総合病院



病院長 清野 義胤

◆概要

所在地…田村郡小野町大字小野新町字槻木内六番地二
開設年月…昭和二十九年五月
開設者…公立小野町地方総合病院企業団(小野町、田村市、平田村、川内村、いわき市)
診療科目…内科、外科、整形外科、小児科、婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リウマチ科、皮膚科、泌尿器科、形成外科、精神科
ほかに訪問看護ステーション「こまちの里」を設置
常勤医師…四人(令和五年四月現在)
病床数…一一九床(一般病床三〇床、地域包括ケア病床三〇床、療養病床五九床)
人工透析…一八床
病院機能評価…一般病院1 Star(G: Ver.2.0 (令和元年十二月認定))

◆沿革

昭和二十九年五月 病院開院(当時の四郡一二町村の一部事務組合として設立)
昭和三十二年一月 総合病院認可
昭和五十四年十二月 へき地中核病院指定
昭和五十五年五月 巡回診療開始(平成十五年一月まで)
平成十一年十月 訪問看護ステーションこまちの里開設
平成二十二年四月 地方公営企業法の全部適用(名称を公立小野町地方総合病院企業団に変更)
平成二十七年三月 現在の所在地に新築移転(ヤマト福祉財団の寄附による)

◆基本理念

「私たちは、患者さん中心の医療を行い、地域保健医療への貢献を目指します。」

◆地域の特徴

当院は、小野町、田村市、平田村、川内村、いわき市(二市一町二村)の一部事務組合として阿武隈山系の中中部、田村郡南部の小野町に設置されています。標高は中心市街地で約四〇〇メートル。四方を標高七〇〇メートルを越える山々で囲まれています。冬、積雪は少ないですが、北西から吹く乾燥した風は

◆当院の取り組み状況

(入院対応) 当院がカバーしている地域は、主に小野町や田村市南部を中心に、川内村、平田村、いわき市の北部地域です。当該地域でまとまった入院病床を有しているのは当院のほかは、田村市や平田村の公立病院、医療法人と数が少なくなっています。高齢化も著しく進んでいることから当院で運用している療養病床は、介護施設との連携や介護する家族を支援する意味で大きな役割を果たしています。令和二年度から運用を開始した地域包括ケア病床は在宅復帰を、一般病床は近隣医療機関・介護施設のバックアップとして機能しています。近年は郡山市の協力病院から認定看護師を招き摂食嚥下障害看護も行っていきます。なお、当院の入院病床は地域のニーズが高い状態が続いていたことから、新型コロナウイルス陽性患者の入院受入れを行って

◆課題と今後の展望

医師及び医療スタッフの安定的な確保が最重要かつ慢性的課題となっています。特に常勤医師の増員は悲願ともなっています。医師の偏在が社会問題になつて久しいですが、引き続き県立医科大学や福島県などに当院の状況を説明し医師の安定的な派遣をお願いしているところです。また、田村地方の三つの公立病院(当院のほか三春町立三春病院、たむら市民病院)の連携についても継続的に協議を行っており、医師やスタッフ不足対応の一環として、連携による効率化を目指しています。

◆外来診療

以降の著しい感染拡大を踏まえ、現在は四床で受入れを行っています。
(外来診療) 地域の診療所は小野町で六医院が開設されているほかは、周辺自治体での開設数は非常に少ない状況です。また、診療所の診療科はほとんどが内科となっており、地域として皮膚科・精神科・耳鼻咽喉科・泌尿器科・婦人科などの診療体制が脆弱な状況です。このようなことから、福島県立医大などから医師の派遣をいただきこれら診療科の拡充に取り組みしています。交通が不便な地域であることから自宅・病院間の送迎も開始しました。新型コロナウイルス対策は令和二年度に発熱外来を開始、三年度からは行政と連携しワクチン接種に積極的に取り組んでいます。

◆人工透析

(人工透析) 非常勤の腎臓専門医師により一八床を運用しています。月水金・火木土及びそれぞれの午前午後実施しています。外来患者同様、送迎も実施しています。

◆救急対応

(救急対応) 医師不足を背景に救急医療対応は現状可能な範囲に限定しています。高度な処置を要する場合や医師の勤務状況により受入れが困難なケースもあり、郡山市などの大規模病院に依存している状態です。

◆訪問系医療サービス

(訪問系医療サービス) 交通の便が悪い地域で、また、近年在宅診療・看取りを希望される患者が増えてきたこともあり、在宅医療サービスの拡充に取り組んでいます。訪問診療・緊急

◆人材の育成やその他の取り組み

往診や当院に併設された訪問看護ステーションによる訪問看護、訪問リハビリを積極的に展開しています。
(人材の育成やその他の取り組み) 地域の医療ニーズに適切に対応するため、認定看護師の育成や特定行為研修を積極的に推進しています。認定看護師については、令和四年度に感染管理分野で一名の研修を了し、令和五年度には摂食嚥下障害看護分野で一名を育成予定です。勤務評定制度も令和四年度より開始しており、職員の能力及び業績の適切な把握と組織力向上につなげていきます。

◆人材の育成やその他の取り組み

また、在宅医療の推進のため訪問系医療サービスも拡大していきますが、今後は緩和ケア病床の運用も考えており、できるだけ患者様が住み慣れた地域で家族と共に過ごせる環境づくりを進めていきます。

新地町より勤務医のつぶやき

医療法人仲裕会渡辺病院 内科 福田 海



り戻しつつあるようだ。

医局で最も下っ端の私にこの度の寄稿依頼が舞い込んだ際は大変驚いた。何の業績もない私には甚だ役不足ではあるが、この誌面を借りて一勤務医の目を通して当院の軌跡を少しでも紹介させて頂くことにする。

渡辺病院は震災後の二〇一四年に南相馬市から県境の新地町に移転し今年で一〇年目を迎える。当初は看護師不足のため三病棟のうち一病棟しか開棟できず、入院患者四〇名／一四〇床と閑散として大変厳しい稼働状況であった。常勤医師や看護職員が徐々に増え、全ての病床を稼働できるようになり、少しずつではあるがかつての勢いを取

り戻しつつあるようだ。

私は移転翌年の二〇一五年に当地に赴任した。震災当時海外研修に出ており、国内の惨状を画面越しに目の当たりにした事が契機となり現在に至る。着任当初の思い出は相馬郡医師会初参加の折、幹部の先生が医師会の先生方一人一人の席へ私を連れて回り紹介して下さいました。この時の感謝を今でも忘れない。開業医の先生方と病院勤務医の距離が近く、顔のみえる関係にとても安心した。何処の馬の骨ともわからぬ若輩者を温かく迎えて入れて下さった地元先生方に厚く御礼を申し上げます。コロナ禍前の先生方との飲み会は今となっては大変懐かしく貴重な機会であった。

当院は現在整形外科及び一般内科に特化した入院病床に変遷を遂げつつある。外来はここに消化器科、歯科などが加わる。当院で診療困難な急性期や重症

症例の多くを公立相馬総合病院、南相馬市立総合病院をはじめ近隣の医療機関に紹介し助けて頂いている。困った際に快く引き受けてくださる専門医の先生方にはこの場を借りて心から感謝を申し上げたい。専門治療後の在宅や施設までの橋渡し役を当院で担い、少しでも当地区の病床逼迫の後方支援になれば幸いである。微力ながら一般医として連携をはかつて参りたい。

内科においては、幅広い高齢者診療を中心にここ数年は緩和ケアにも力を注いできた。急性期から慢性期まで入り乱れての入院診療は病棟スタッフにとつて負荷のかかる現場であり申し訳なく思う。彼らの懸命なケアの実績のお陰で、近隣の医療機関から少しずつ緩和ケアの転院先あるいはバックベッドとして当院をご指名頂けるようになってきた。まだまだ発展途上ではあるが、地域医療に貢献できる様職員共々精進して参りたい。

二〇二二年三月には内科病棟のクラスターを経験した。恥ずかしながらそれまで COVID-19 感染対策の院内マニュアルがなく、慌てて作成し県対策チームの先生に加筆修正までして頂いた。またクラスター対策中に事務部やリハビリ課など多職種連携がよく、収束も速やかであったと評価頂いた。メデイカルスタッフの機動力や医局の風通しの良さは当院の大きな魅力であると思う。

当院は南相馬市から新地町へ移転することで県境の幅広い地域医療への貢献と共に、隣県からの人員確保も狙った様だ。常勤や当直医の多くは仙台圏からの応援で成り立っているという現実があり、その恩恵ははかりしれない。しかし同時に地域医療には地元根差した「現地」の医師が必要だと感じる。その役を担うべく、町内に住んで八年になる。県最北端の新地町は豊かな自然に囲まれ、温かな町民の方に生まれ大変住みやすい環境だ。子育てをしながら長く新地町に根をはり、地元の復興をみつめて参りたい。

最後に当院の事務職員を紹介

する。約四〇年の事務キャリアを東北各地の医療に捧げ、二〇一八年に当院に赴任してから互いに奔走してきた大切な同士だ。院内の数々の難局を共に闘い乗り越えてきた。事務室を飛び出して必ず現場に赴き、職員一人一人の声を耳を傾け、その鋭く温かな眼差しに助けられた職員は少なくない。私もその一人である。優秀な医療人との出会いは医師人生の宝であり、その手腕をもっと側で拝見したかった。彼女への感謝を文末に添えて、当院の軌跡としたい。



地域のニーズに応えられる病院を目指して

福島西部病院 院長 菅谷 芳幸



二〇二二年九月一日に奥秋興壽先生の後任として福島西部病院院長に就任いたしました。福島県病院協会の皆様には、常日頃から大変お世話になり、誠に有難うございます。

私は一九九七年に東北大学工学部を卒業後、一九九九年に福島県立医科大学に入学、二〇〇五年の卒業後に同大学附属病院での初期臨床研修を経て、二〇〇七年に旧第三内科（渡辺毅教授）に入局しました。専門は糖尿病および内分泌疾患で大学院時代の研究をしていました。二〇一一年の東日本大震災の際には双葉厚生病院（重富秀一院長）に勤務しており、津波被害による患者の対応や福島第一原発事

故による患者の避難に携わりました。その後、大学では旧第三内科から細分化した現在の糖尿病・内分泌代謝内科で島袋充生教授のご指導を賜り、二〇一六年から当院で内科医として勤務し現在に至ります。

当院は昭和六十三年（一九八八年）に福島市東中央に開院し、今年で創業三五年になります。病床数は二病棟九九床で、内科、消化器内科、糖尿病内科、外科、消化器外科、乳腺外科、婦人科、泌尿器科、歯科、歯科口腔外科、リハビリテーション科の計一一

診療科を標榜しております。当院が位置する福島市西部地区は今でこそ住民の多い住宅街となっておりませんが、開院当時は人口が少なく医療施設も少ない地域でした。地域に密着した医療を提供し続けながら地域とともに発展し、一九九三年には当院健診センターを開設し、地域住民の健康促進および病気の早期発見に貢献してきました。当院の外来患者は老若男女幅広い層におよびますが、病院の規模

や立地条件などから入院患者は周辺地域の高齢者が比較的多く、老衰などで入院できる医療機関がなく当院で最後を迎えるケースも少なくありません。一方で当院は夜間休日の二次輪番病院（内科外科）でもあり、救急患者の受け入れも行っております。急性期、慢性期、回復期など特化する分野を絞り、独自性をアピールすることで医療圏の

ニーズに対応する病院が一般的になつてきている昨今、当院では急性疾患や慢性疾患、更には高齢患者の看取りまで対応しており、ある意味時代の流れに逆行しているという印象もあります

が、特に高齢患者の家族にとっては最後まで看取ってもらえるという貴重な役割も担っています。今後の当院のあり方については模索しているところですが、基幹病院や開業医の先生方との連携を深めながら、地域住民が何を一番望んでいるのか、それに対して当院で何ができるのかに重点を置き、福島の医療に貢献できればと考えております。

コロナ禍では当院でも二〇二〇年十二月に大規模なクラスタを発生してしまい、皆様に多大なご迷惑をかけてしまいました。当時はコロナ患者の転院受け入れや二次輪番の交代など福島医大をはじめ様々な医療機関に助けていただき、改めて御礼申し上げます。その後は病院業務に支障をきたすような大きなクラスタはありませんでしたが、常に職員の誰かはコロナ陽性となり、慢性的なスタッフ不足の状況が続いていました。当院はコロナ病床は申請しておらず、後方支援病院として貢献してきましたが、フルPPE対応が必要な状況も多く、スタッフの疲労は蓄積し職場の雰囲気も重苦しい日々が続きました。

最近では第八波も沈静化の兆しを認め、二〇二三年五月には新型コロナウイルス感染症も第二類から第五類感染症に引き下げられる予定です。スタッフの負担軽減を期待する一方で感染拡大による医療逼迫に対する不安もあり複雑な心境ですが、当院としては行えることを着実に実行しながら感染状況の変化に対応していく所存です。

二〇二四年四月からは医師の働き方改革が始まりますが、当院も新たな制度に対応すべく準備中です。二〇二三年四月の時点で当院の勤務医師数は常勤医

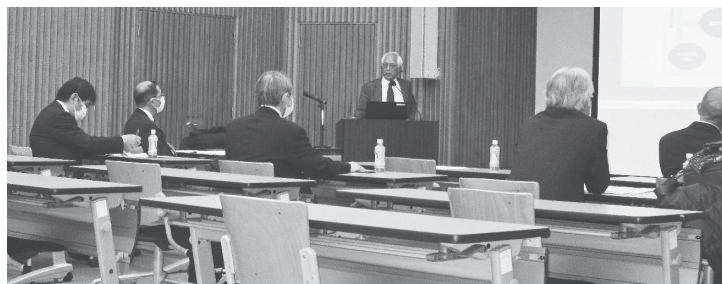
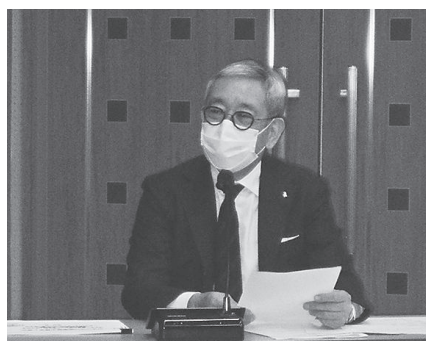
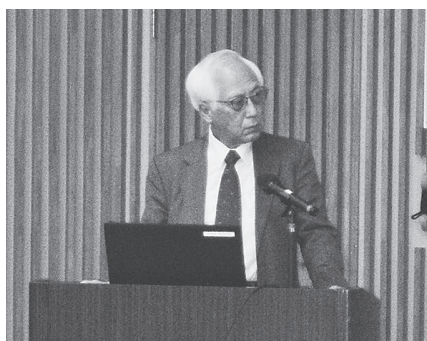
師三名、非常勤医師四名で、外部からの応援に頼らざるを得ない状況です。特に宿日直に関しては医大からの日当直医の応援が必要不可欠な状況のため、宿日直許可を取得しようと苦労しているところですが、幸いなんとか許可を取れそうな見通しが立ちました。ただ、安定した病院運営のためには医師不足の改善は必須であり、宿日直許可が取れたからと安心せず、引き続き常勤医師の拡充に取り組み参ります。

新型コロナウイルスの影響で様々な問題が浮き彫りになり、コロナ収束後も病院経営が厳しい状況が続くとの意見もあります。二〇二三年四月より当院では従来の二病棟から一病棟に変更しスリム化する予定です。今後は関連病院である福島南循環器科病院との連携を深め、法人内の医療資源を適切に配分することで時代の変化に柔軟に対応していく所存です。また、地域開業の先生方との連携を深めながら入院期間の短縮、在宅医療の促進を目指し、住民のニーズに対応できるような地域に根ざした病院であり続けられるよう努めています。

皆様には、引き続き当院へのご支援とご鞭撻をどうぞよろしくお願い申し上げます。

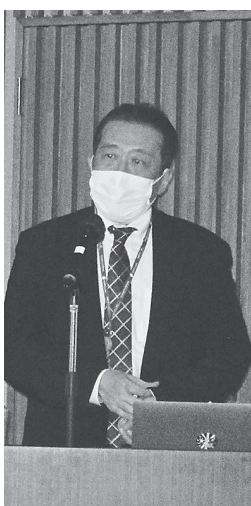
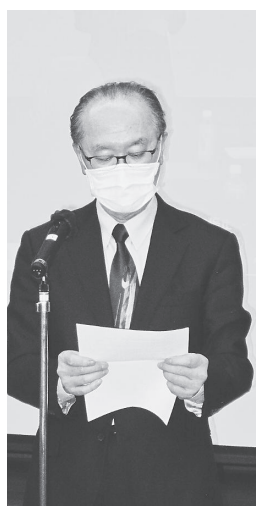
令和四年度『経営管理研修会』を開催

令和五年一月二十七日(金)福島県医師会館一階大会議室において、Webハイブリッド方式による令和四年度『経営管理研修会』を開催した。今年度は、一般社団法人日本専門医機構 理事長 渡辺 毅先生をお迎えして、『日本における専門医制度・歴史と現状』と題し、専門医制度の成り立ちから、専門医機構の役割、今後の新専門医制度についてご講演をいただいた。(参加者二六名)



令和四年度『医療研修会』を開催

令和五年二月十六日(木)福島県医師会館一階大会議室において、Webハイブリッド方式による令和四年度『医療研修会』を新型コロナウイルス感染症拡大の影響により三年ぶり開催した。今年度は、SOMPPOジャパン株式会社サイバーセキュリティ事業本部特命部長 落合正人先生をお迎えして、『実例を踏まえた医療機関に迫るサイバー攻撃への対応』と題し、昨今の医療機関が狙われた原因や、サイバー攻撃を防ぐ対処方法、最新情報の重要性など被害を受けないための注意点などについてご講演をいただいた。(参加者三〇名)



令和四年度『救急医療研修会』を開催

令和五年三月二十八日(火)福島県医師会館一階大会議室において、Webハイブリッド方式による令和四年度『救急医療研修会』を開催した。今年度は、公立大学法人福島県立医科大学医学部救急医学講座教授 伊関 憲先生をお迎えして、『ポストコロナ時代での救急』と題し、新型コロナウイルス感染症が及ぼした県内の救急医療体制の現状と課題、医療機関における救急搬送困難事例、ドローンを活用したAEDの対応、今後の救急医療体制の課題などについてご講演をいただいた。(参加者一三二名)

